

消防の広場

119

火事・救急・救助

平成23年6月から
すべての住宅に
住宅用火災警報器
の設置が義務化
されています

自助・共助の連携で

災害に立ち向かう

東日本大震災から約8カ月。大きな地震と津波を受けた被災地では、復興へ向けた取り組みが進められています。大災害を経験したいま、いつ・どこで遭遇するか分からない災害に対して、私たちができること、私たちがすべきことについて考えてみましょう。



■助ける側も被災者
災害が起これば、「自助・共助・公助」といわれる多くの力が結集しなければ、復旧・復興はかきません。中でも「公助」は、行政が行う支援活動で、被災者にとって大変重要な力です。しかし、東日本大震災では、官公庁や消防・警察などが同時に被災し、本来担うべき公助の力を十分に發揮できませんでした。大災害が起これば、助ける側が同時に被災者となり、「被災者が被災者を助ける」という状況になります。



津波で被災した南三陸町(宮城県)の防災対策庁舎

にあるボールや車用のジャッキを活用するなど、自主防災への取り組みが活発になりました。



阪神淡路大震災 「近助」の力で2万7,000人を救助

阪神淡路大震災では、建物の下敷きになるなどの自力脱出困難者が約3万5,000人いたといわれており、その内77%の約2万7,000人は家族や近隣住民によって助け出されました。

以来、身近な人が助け合う「近助」という考えが注目され、身近



阪神淡路大震災で倒壊家屋に閉じ込められた人を近所の人が協力して救出の様子(提供:阪神大震災を記録しつづける会)

■「近所」で「近助」
建物の下敷きになるなどで多くの犠牲者が出た阪神淡路大震災では、消防・警察などの到着が遅れる状況にある中、同じく被災した近所の人たちが協力して、倒壊した建物の中から多くの人を助け出しました。その数は、消防・警察・自衛隊などが救助した人数をはるかに上回るものです。

で、生存者の救出に大きな役割を果たしました。
助けを求める人の一番近くにいるのは、地域の中でも隣近所のかたなど身近な人たちです。
近所の人たちが協力し、自分たちの手で助け合おうとする「近助」の力が、かけがえのない多くの命を救い、また私たち自身を守ってくれることにもなります。

■日ごろから顔の見える関係を
いざという時に「近助」の力を発揮するためには、日ごろからの近所付き合いが大切です。
日常生活だけでなく、地域で行われる防災訓練などに積極的に参加し、

防災について一緒に学ぶことで顔の見える関係をつくりましょう。
自分の家族に助けを必要とする人がいることや、近所に体の不自由な人や高齢者だけの世帯がないかなど、お互いのことを知っておくことが「近助」につながります。

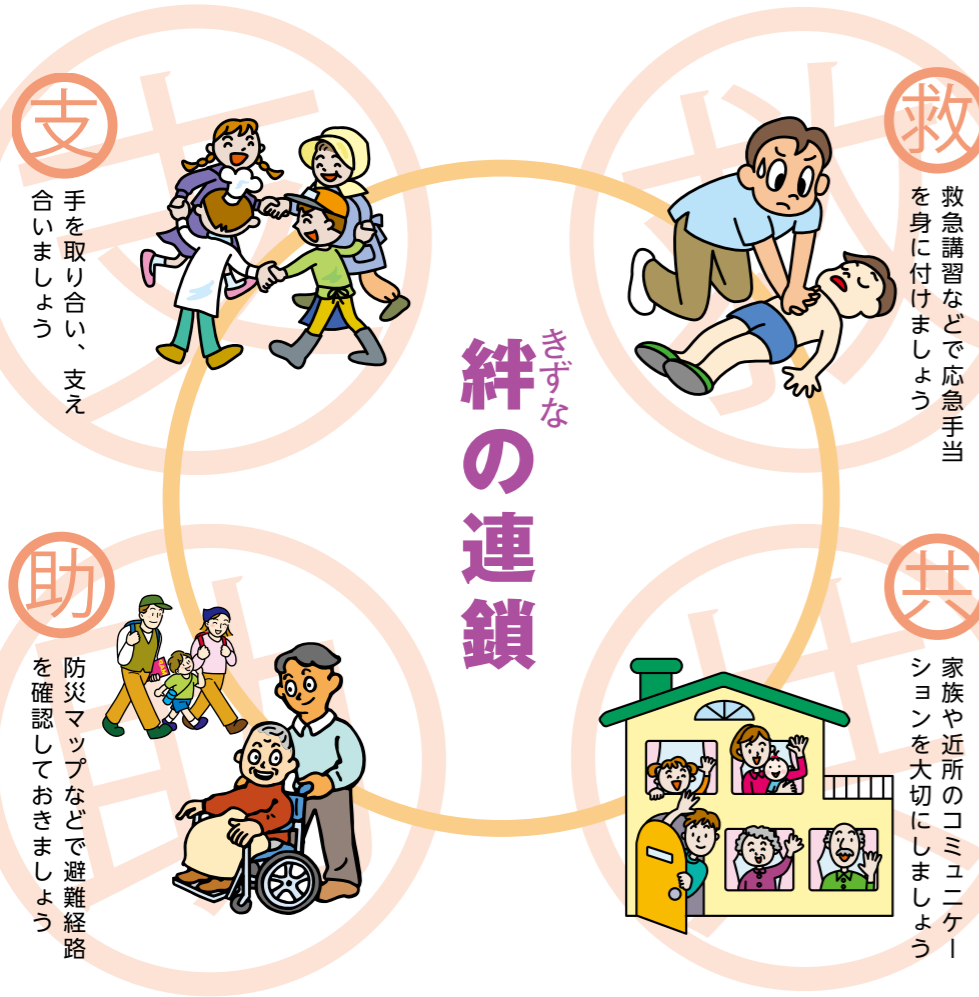
■3日間を乗り切る力
他地域からの災害応援など、「公助」の体制が整うまでには、約3日かかるといわれています。
助けを待つだけでなく、家族・近所の人たちが協力して助け合い、この3日間を乗り切ることが大切です。



■支え合うまちづくり

大きな災害を前にすると、一人の人間ができることには限界があります。

日ごろから災害への関心や防災への意識を持ち、家族や地域を守るために自分たちに何ができるのかを考え、今の自分にできることを少しずつでも始めることが大切です。一人ひとりの防災意識が近所の意識につながり、地域全体の防災意識につながります。支え合って、災害に立ち向かうことができるまちづくりを目指しましょう。



救急一口メモ



市消防本部救命救急士 原 光海

迷わず救急車を

脳梗塞は脳の血管が詰まる病気で、日本では寝たきり状態になる原因として第1位の病気です。

脳梗塞にはさまざまな症状がありますが、重要なのは、できるだけ早く病院で治療を開始することです。もし①片方の顔や手足がしびれる②片方の目が見えにくい③ろれつが回らないなどの症状が起これたら、それは脳梗塞の前触れかもしれません。迷わずすぐに救急車を呼んでください。①②③の症状は、数分程度で治まる場合がありますが、治まらなかつた後も頭の中では病気が進行している可能性があります。「これくらいなら大丈夫」と考えず、早く行動(治療)することが、後遺症の軽減につながります。脳梗塞を予防するためには生活習慣の見直しが大切です。バランスの良い食事や適度な運動などを心掛けます。

「脳梗塞」の前触れを見逃さない

「迷わず救急車を呼んでください。①②③の症状は、数分程度で治まる場合がありますが、治まらなかつた後も頭の中では病気が進行している可能性があります。」